

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 5 月 7 日現在

機関番号：14501

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520285

研究課題名(和文)オリエンタリズムと近・現代における日本の「伝統的」物語の創出

研究課題名(英文)Orientalism and the invention of the traditional narrative in modern Japan

研究代表者

遠田 勝 (Toda, Masaru)

神戸大学・その他の研究科・教授

研究者番号：60148484

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円

研究成果の概要(和文)：「辺見じゅん『十六人谷』伝説と『雪女』」他二編の論文とシンポジウムでの発表等により、オリエンタリズムと西洋ロマン主義の産物である「雪女」が、日本で民話化されていく過程で、周辺民話の「雪女」化、すなわち西洋ロマンスへの書き換えがあったこと等を論証し、それら事実から民話・伝説の近代の語り手が、伝統的物語の守護者・伝承者ではなく、さまざまな意図や感情のもとで、物語を自由に創造・改変する作家であったことを指摘し、オリエンタリズムと日本の「伝統的」物語の創出の関係について論証した

研究成果の概要(英文)：My study shows that the famous Toyama legend “Jyurokunin-dani or the legend of sixteen woodcutters” told by Henmi Jun is not fully based on the oral tradition in Toyama. She wrote it under the great influence of Lafcadio Hearn, and incorporated the local legend with Hearn’s “Yuki-onna.” Although it is generally believed that “Yuki-onna” is an old tradition of Japan and was adapted and translated into English by Hearn, the recent studies prove that Hearn invented the story from various fragments of the local tradition. My study concludes that the modern writers of the Japanese folklore are innovative creators and share their motives and techniques of story-telling with the Western writers.

研究分野：比較文学

キーワード：ラフカディオ・ハーン 雪女 オリエンタリズム 民話 伝統の創出 辺見じゅん 十六人谷伝説

1. 研究開始当初の背景

研究代表者(遠田)これまで平成16~18年度に科学研究費補助金(基盤研究C)を得て、その成果報告書として『オリエンタリズムの比較研究 チェンバレンの『日本事物誌』を中心に』を刊行した。また、平成21~23年度に科学研究費補助金(基盤研究C)研究題目「明治期ジャパノロジーにおけるオリエンタリズムの明暗」を得て、新曜社より『転生 する物語 小泉八雲と「怪談」の世界』(平成23年6月)を単著として刊行した。両研究の成果により、明治期オリエンタリズムの複雑な働きと功罪はある程度までは明らかになった。

たとえば前者の研究において、チェンバレン(B.H.Chamberlain)の主著である『日本事物誌』初版(1890年)から最終の第6版(1939年)までの各版の主要項目の内容の変遷を調査したが、これによって、最終版によってのみ理解されていたチェンバレンのオリエンタリズムが、各版によって、かなり揺れ動いていることが判明した。研究代表者は、それを具体的に証明するため、『日本事物誌』の項目「対外条約」の各版を比較し、チェンバレンが「神戸居留地」に抱いたユートピア的な市民社会の夢と、その文明観に含まれる植民地・帝国主義的な側面と、チェンバレンが日本のナショナリズムに抱くオリエンタリズム的な歪みを指摘した(「チェンバレンが神戸居留地にみた夢 『日本事物誌』異本考」初出:神戸大学『近代』第九七号、上記報告書に再録)。

また平川祐弘編の英文論文集:*Lafcadio Hearn in International Perspective* (Global Books Ltd., Kent, U.K., 2007)に発表した論文「Hearn's Romantic Representation of Shinto, the Way of Japanese Gods」(pp.153-58)においては、ラフカディオ・ハーンの日本論と神道論に内在するオリエンタリズムと神道のクレオール化について考察した。

また『転生 する物語 小泉八雲と「怪談」の世界』においては、ハーンがいかに関わりオリエンタリズムを利用して、西洋人読者を自己の物語世界に引き込んでいるかを検証した。その第一章「小泉八雲と日本の民話 『雪女』を中心に」においては、ハーンが、北欧の夢魔伝説にアイデアをえて、全体が日本の口承民話であるかのように装い創作した「雪女」が、青木純二、巖谷小波、松谷ゆみ子、鈴木サツといった、有名無名の作家や語り部たちの改作をへて、「真正」の日本民話として定着してゆく過程を実証的に後づけ、オリエンタリズムに由来する物語が、いかにして、日本の民話運動が奉じる土着主義に受け入れられたかを論証した。また、その近代西洋のナラティブにより、ハーンが日本の伝統的説話の語りを変容させ、日本の近代文学にも大きな影響を与えていることを論証した。

この二件の科学研究費補助金の成果により、欧米人が明治日本を英語で表現したときの、まぬがれ得ない表現・思考様式としてのオリエンタリズムについて明らかとなったことは以下の通りである。

チェンバレンの場合、それは西洋文明を絶対的な価値尺度として、日本文化を矮小・戯画化して語る原因となり、また、横浜・神戸などの居留地の治外法権を擁護する論拠となり、西洋の植民地・帝国主義を直接に支持する立場をとらせる一方で、逆に、その理想化された日本の居留地がユートピア的理念となって、西洋近代の国家主義と日本の狂信的ナショナリズムを批判する視座を提供していた。

ハーンの場合、同じオリエンタリズムが、チェンバレンとは逆に、キリスト教的道徳・価値観と西洋文明の絶対的優越意識を相対化する働きをし、明治期の欧米人には珍しい日本文化への肯定的評価を引き出す原動力となったが、一方では、遺作の『神国日本』などに展開される独自の日本宗教論においては、伝統的神道に、西洋由来の汎神論と人格神的要素を混合したことで、神道が「クレオール」化してみえる要因ともなっていた。(ただし、そこには、神道が現代日本に生き延びるための、貴重な示唆と提案が含まれていることは、上記論文で指摘したとおりである。)

すなわち、チェンバレンの場合も、ハーンの場合も、日本におけるオリエンタリズムの働きは、異文化の歪曲と圧殺というオリエンタリズムの公式定義とは異なる、複雑な働きをしている。とりわけハーンの場合、そのオリエンタリズムが芸術作品において用いられているため、その役割も用法も複雑で、さらにいっそう精緻な研究が求められている。これが研究当初の明治期日本のオリエンタリズムをめぐる研究の状況である。

2. 研究の目的

本研究が調査の対象とするのは、これまでのような英米系ジャパノロジストや知識人による研究論文・エッセイではなくて、文学作品、とりわけ、オリエンタリズムとは一見、無縁に思える、日本の古物語や伝説・民話の翻訳や近代における再話である。

これは先のハーンの「雪女」の伝承研究により明らかになったことであるが、オリエンタリズムは、西洋人に「日本的物語」や「伝説」を虚構・創造させ、それを西洋に「真実」の日本として伝えただけで、そうした、いわば「輸出用」の日本の物語が、翻訳として輸入されることで、近代日本においてエキゾチズムやモダニティの芸術表現として歓迎され、日本人による、新たな改変を経ることで、日本の「伝統的」物語として受容・再生されていったからである。すなわち、オリエンタリズムは、近代日本の「伝統」的物語の創出に関与していたのである。

本研究の目的は、こうした日本の伝統的物語におけるオリエンタリズムの特異な働きを具体例により実証することである。

3. 研究の方法

前段で述べたように、ハーンの有名な『怪談』やその他の再話物語は、物語文学におけるオリエンタリズムと、その日本への逆輸入、そして、新たな近代における「伝統の創出」として考察することができる。

純然たる英語英文学世界での創作であるにもかかわらず、日本各地で昔ながらの口承民話として受容された「雪女」は、やや極端な例ではあるが、「耳なし芳一」にせよ、「むじな」にせよ、素材を日本に得てはいるが、その中心的モチーフや技法は、明らかにヨーロッパ文学の伝統に由来し、また、世紀末芸術家であるハーン個人の芸術思想や技法に強く彩られた作品である。しかし、翻訳や翻案、あるいは「小泉八雲」というナショナリティの変更によって、それら物語は、「真正」の日本の伝説・民話として、受容されていたのである。

本研究の方法は、ハーンの再話物語を中心にその受容のプロセスを実証的に解明することであるが、調査対象をできるかぎり広げて、ハーンだけではなく、「長谷川ちりめん本」の英訳（とりわけ一八八五（明治一八）年にはじまる英訳「日本昔噺」シリーズ（二〇編二一冊）などにも目配りをし、時代的にも、明治を中心とするのではなく、第二次世界大戦後の日本の民話ブームや同じく一九六〇年代以降、ブームとなった日本昔話の漫画化・アニメ化と映画、テレビでの上映・放映などとも関連づける。

このようにして、ハーンを中心とする、日本文化へのオリエンタリズムの浸透が、いかに近代日本の「伝統」的物語の創出に関与していたかを、活字と朗読・語り聞かせ、漫画とアニメ、テレビと映画など複数のメディアにわたる、明治から昭和にいたる長期間の変容現象として、総合的に論証する。

本研究の基本的方法のひとつとなる「伝統の創出」論とは、主にエリック・ホブズボウム、テレンス・レンジャー編の『創られた伝統』から始まる、文化人類学と歴史学における「伝統」の見直しと批判を指す概念であるが、現在では、人文学のほとんどの分野に拡散し、たとえば、Stephen Vlastos 編の *Mirror of Modernity: Invented Traditions of Modern Japan* に取り上げられた主題の一部をあげてみても、「日本式労働管理」「聖徳太子イメージの変容」「日本の村」「満州」「柳田国男の『日本』」「講道館柔道」「横綱」「カフェの女給」といった具合で、むしろ、この「造られた伝統」という批判にさらされていない事象や概念を探すほうが難しく思える。しかし、日本の伝説・民話の語りにおける、オリエンタリズムの関与と伝統の創出については、未だに十分に考察がなされてい

ないのである。

4. 研究成果

近代日本のさまざまな伝説・民話・物語についての関連資料の収集を行い、その分析成果として、平成 24 年に「辺見じゅん『十六人谷』伝説と、『雪女』 『人に息を吹きかけ殺す』モチーフと民話の語りにおける伝統の創出（その一）」（神戸大学『近代』一〇七号）に発表した。

また同年12月15日、富山大学において開催されたシンポジウム「小泉八雲の新しい地平：最近のラフカディオ・ハーン研究をめぐって」において「富山の『十六人谷』伝説（辺見じゅん）と『雪女』 ハーンと日本の民話」としてハーン研究者ならびに富山の一般聴衆にむけ成果を報告した。

その時の議論や批判をふまえて、翌平成 25 年、「辺見じゅん『十六人谷』伝説と、『雪女』 『人に息を吹きかけ殺す』モチーフと民話の語りにおける伝統の創出（その二）」（神戸大学『近代』一〇九）を発表した。

この三篇の発表により明らかになったのは、富山県黒部地方を代表する民話・伝説と思われていた十六人谷伝説の複雑な成立過程である。この伝説は、元々は富山藩士野崎雅明が文化一二年（一八一五年）頃に書き著した『肯構泉達録』の「黒部山中の事」などに見える、山に入った袖が、神のお告げを無視して樹木を切り倒したために、皆殺しになるという、山の禁忌と懲罰の素朴な話であったのが、昭和初期に至り、再話作家や紀行文作家により、美女が現れ、木こりの舌を抜くという煽情的な形の物語に書き改められ、さらに富山出身の作家で民話研究者の辺見じゅんが、ハーンの「雪女」を大幅に取り入れ、木こりの弥助が、仲間を殺した樹霊の女に恋して、その樹霊からここで見たことを話してはならないと命じられるが、その樹霊が何年もしてから美しい娘の姿で訪れると、弥助はついに話すなという禁忌を破り、命を落とすという、典型的な、伝説の「ロマンス化」が行われている。

そしてこの「雪女」をもとに新たに創作された十六人谷伝説が、一九七〇年代半ばから一九九〇年代の半ばまで、ほぼ二十年にわたり、TBS 系列で放送された人気番組「まんが日本昔ばなし」でアニメ化され、人気を博したことで、富山伝説の定番となり、後に出版される伝説集などにも、この辺見版が採用されていくことになる。

このようにハーンが創作した西洋的ロマンスである「雪女」が日本的に民話化されていく過程で、ほぼ同時的に、隣接する民話の「雪女」化、すなわち西洋的なロマンスへの書き変えも行われていたのである。この「雪女」の民話化と民話の「雪女」化が示すものは、民話・伝説の語り手というものが、伝統的な語りの守護者・伝承者ではなく、さまざまな意図や感情のもとで、伝統的物語を自由

に創造・改変する作家であるということである。

しかし、それにもかかわらず、そうして創造された物語が、その独自の工夫や創造性を賞賛されることもなく、かといって逆に伝承の破壊であるとして批判されることもなく、その「民話」という形式のためだけに(いや、その形式ですら明確に定義されないままに)「無名の人々が口承で伝えた」古い日本の「遺産」「記憶」であるとして、小さな村や地方の名前を冠され、記録・出版されていったのである。これが、一九六〇年代から八〇年代の日本を華やかに彩った「民話の時代」の実態だったのである。伝統的説話として文字に書き留められ、無批判に出版されていったこれら「口承」「民話」を、新たに批判的に検討しなおし、その歴史性に疑問符をつけるとともに、語り手たちのさまざまな工夫と創造に正当な評価を与えること、この二点の作業の必要性を代表者は強く主張した。

オリエンタリズムと近・現代における日本の「伝統的」物語の創出のもう一つの事例の研究として、研究代表者は、「ハーンにおけるオリエンタリズムと日本の伝統的説話の変容 - 『破られた約束』の典拠と成立過程を考える」(神戸大学『近代』第一一一号)を発表した。

「破られた約束」は、ハーン研究の旧来の注記によれば、ハーンが妻のセツから聞いた出雲の民話をもとにした怪談であるということになっている。すなわち口承民話を英語・文字化したものと考えられていた。

しかし今回、「破られた約束」の成立過程を調べてみると、その出雲の口承民話の元は、江戸時代に書物として広く流布していた『諸国百物語』の一篇「豊後の国何がしの女ばう死骸を漆にて塗りたる事」であった可能性が強く、大きな流れからいえば、書物からの口碑化を経て、ハーンの英語化、さらには日本語への翻訳をへて、広く出雲の「民話」として知られるようになったものであることが判明した。ここにもまた「雪女」と同様の、日本の民話、伝説の複雑な成立伝承過程をみることができる。

ハーンの「破られた約束」は、確かに日本の民俗的伝統である「後妻打ち」説話を英語化したものであるが、単なる英語化ではない大きな改変もほどこされていた。それは、作者自身が物語のなかに登場し、コメントを差し挟む「ロマンティック・アイロニー」という西洋近代ロマン派文学特有の技法で、ハーンはこの作品の末尾で、自ら登場し、異議を唱えるような形で、怨霊となった前妻の殺人行為に、フェミニズム的理解と共感を示しているのである。

物語の筋書きそのものが伝わった「雪女」のケースとは異なり、ロマンティック・アイロニーという文学技巧とフェミニズムという近代思想の移入の問題であるので、実証は難しいものの、こうした西洋近代文学の語り

と思想が正面から日本の伝統的「民話」の語り導入されたことは、ハーンを手本と仰いだ近代日本の民話・伝説の語り手たちに、きわめて大きな驚きと影響を与えたと推察されるのである。ここにもまた、ハーンのオリエンタリズムが近代日本の伝統的物語の創出に關与した事例を見ることができ

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計3件)

遠田勝「ハーンにおけるオリエンタリズムと日本の伝統的説話の変容 - 「破られた約束」の典拠と成立過程を考える」、査読無、2014年11月、神戸大学近代発行会「近代」第111号(p1-17)、単著。

遠田勝「辺見じゅん「十六人谷」伝説と「雪女」 - 「人に息を吹きかけ殺す」モチーフと民話の語りにおける伝統の創出(その二)」、査読無、2013年11月、神戸大学近代発行会「近代」第109号(p1-15)、単著。

遠田勝「辺見じゅん「十六人谷」伝説と「雪女」 - 「人に息を吹きかけ殺す」モチーフと民話の語りにおける伝統の創出(その一)」、査読無、2012年10月、神戸大学近代発行会「近代」第107号(p1-16)、単著。

[学会発表](計1件)

遠田勝「富山の「十六人谷」伝説(辺見じゅん)と「雪女」 ハーンと日本の民話」、2012年12月15日、シンポジウム「小泉八雲の新しい地平：最近のラフカディオ・ハーン研究をめぐって」(富山大学)。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

遠田 勝 (TODA, Masaru)

神戸大学・国際文化学研究所・教授

研究者番号：60148484